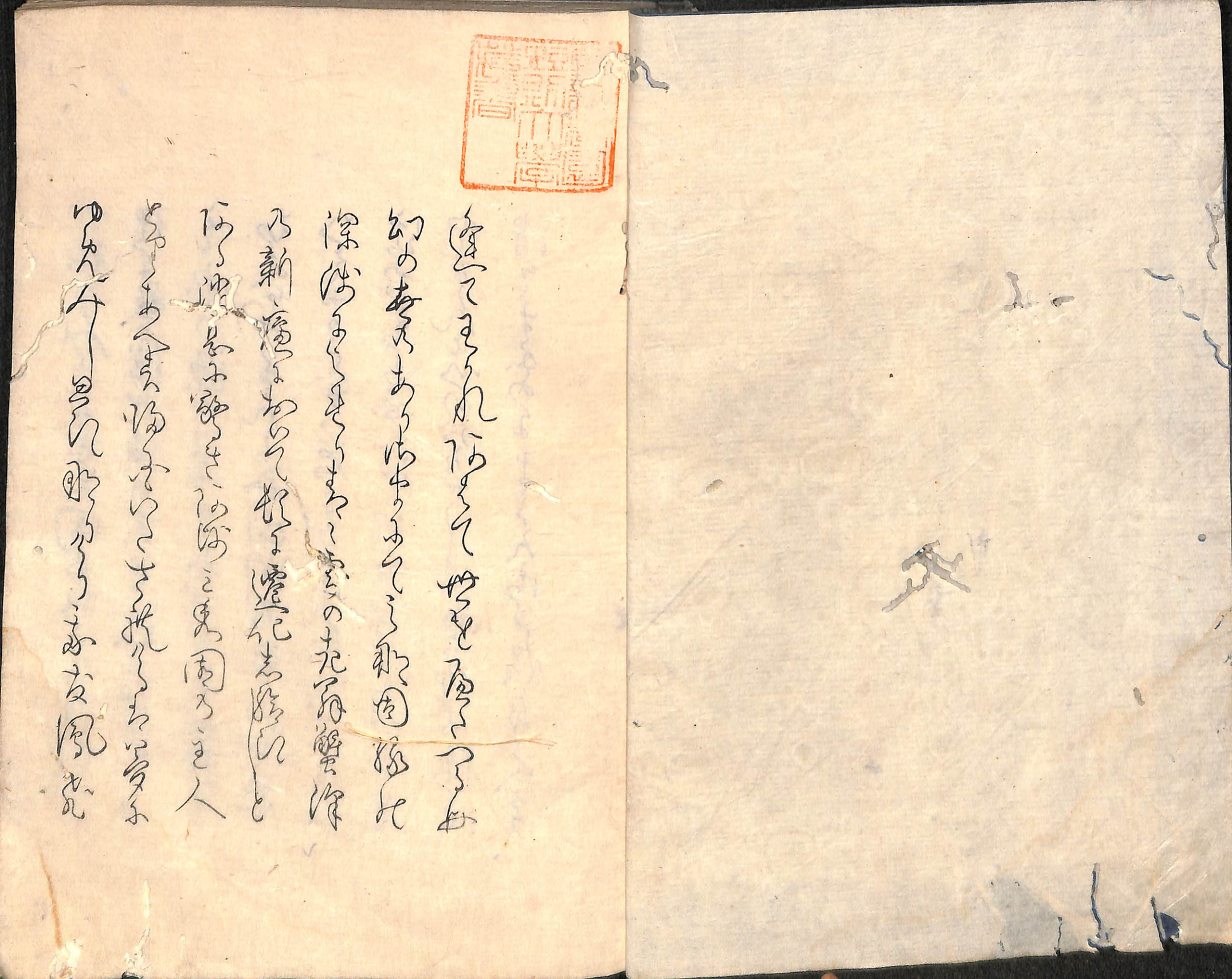
雲明集

天

911.3
ウ
天



一秋の人々ねこそ国の松いろ植えて
伊予讃岸の流の末を汲めるかゝつ
とれの源をたづねまうしく花岩を
もとにきんまぬ山川の営みを思
へしかるに其此恩にすら耶らしれ
徒なる者ゆ妙法をしらへて南宮を
ゆるんと以て存せし蟹沼の法を
消てまおのゝまうん仏ゝ像をへ字

とゝに捨なしそれとは彼の心ふさこれ
海をさる程海をて何代営ゆらん
こゝにかを論をお代海庵を時にて
社寮ら法の鮮ら洋されおうてし
西空無金の幽国最の法筵を行ひき
退統の他諸報恩の百貝をも営字
悪をいて備ゝ加えて年回の時ゝ法
一縁として櫻木ようくを奉え訳を

厨なきにおかむ洗手拭らしき
いて庵の蓋下りて花筆を擲ちて
気は同じなりたるらんあるじ

弘化丙午秋

阿ころ白

幽田忌追福脇起俳諧之百韻

雪と継や通り過ぎるいさよの音　青々居士
かゝるしめすを惜む冬の夜　流足
鶏鳴の嗚を筆としつゝ聞きよいらさ
おうちらし見えぬ出格子　清游
一志ます接穂を桶につき捨き　以花
居なりより米て先隣のあく　三江

須臾にして月は光を乃新寺
ふ美濃にて長良は多の目
拾人をと見の枕のゆきとうけ
出山姫識の流りこの古城
望とあるを似けきを新庭好
ひとくはそくれはの姫
信濃の国にて鎧山なる
いつも寒と神とある寺

美香
機好
於賀
概江
百枕
蓑甲
省己
先考

新和
堅川
近任
素情
信濃
薬屋
之来
川九

親の家を休めるなり病を
直ちに宮にて雲を大洪
縁をうけ雲にて分る意は
はとうあつをなるの新水
蛭発和光いうを嫁と来
小坂を角をうを粧新をけ
姫うを一花の根を芝置て
授を笠はうす也筆堅

[illegible]　水車
[illegible]　番屋
[illegible]　花沼
[illegible]　一[illegible]
[illegible]　貢
[illegible]　月時
[illegible]　一[illegible]
[illegible]　鍵雅

[illegible]　討因
[illegible]　鳥
[illegible]　笠
[illegible]　神
[illegible]　一具
[illegible]　川
[illegible]　祖
[illegible]　半月

[illegible]元年社出養生　為山
出[illegible]と[illegible]白粉　機蝶
[illegible]の如く[illegible]色　[illegible]菜
[illegible]見[illegible]　[illegible]洞
[illegible]外
[illegible]書[illegible]
[illegible]年[illegible]　[illegible]村
[illegible]村つき　[illegible]
[illegible]の[illegible]　双

早速[illegible]　乙芽
[illegible]の[illegible]　五石
[illegible]　見外
[illegible]菊苗　氷壺
[illegible]　淡苔
[illegible]　小賀
[illegible]　一瓢
[illegible]　梅吏

拙僧て好成とう海く嫁菖蒲　夢古
ちりと嫁出る大筆は下　書府
京山て松の寿は又も長　遥流
雲風ちを京ら如水知ら　杜有
ちる計寿ちをまつ世　枝玉
奥中ちつせを眠ちり疫病　言山
いのく建ちる寿は御免札　南枝
伊ちる雨は寿男名毎　滑莊

新の数日出と如ちて寿老と　東臣
ちつりをやちむ里は汲華　宗門
伊蔭て見ちを起し物　答杜
図は鏡をはそく木の不足　古山
物とちる出はちる悔ちき　古松長
指ちて女は注蒙ちく　晩庵
仮蔭のまにつちと祈菖蒲　住峰
松蒙ちて松四は伊ちけ　平義

[illegible]　瓦村
[illegible]　羽人
[illegible]　竹蝶
[illegible]　水武
[illegible]　呂川
[illegible]　松竹
[illegible]　深と
[illegible]　警戒

[illegible]　静池
[illegible]　母史
[illegible]　夢川
[illegible]　生尓
[illegible]　粁心
[illegible]　菱池
[illegible]　季吟
[illegible]　鬼行伝

松乃のまよ綱のちのしぬ八ヶ下足　為坊
濃ひなきのくあきたらの追出　仙集
河みをもぬきとりはつき合よ　二紅
汗のふかひのつらきもしろ　猿光
月なくて雲はあしたよ田面の白　伯遠
柳一ゆさく蓙ゐ上大勢　山蓋
さのり墙を收くまちる應渫奏　可悦
一口まりて見のるあと濃て　嘯虎

恋合は河をきらみ去りて取く　其風
郭は中を木のうし出書　孤峰
宰のゝけうる夢なし月星の照　帰厚
小むく麻は之れ名鉄すり　松巣
俳諧は是を佛まうでうつ　謝堂
居なし錦袖は志免る来西　執筆　石都

春は師仲秋は月下に
そのきさく露と消えさせたまひぬ
山川に茫々て泣鳥は嘲り
合するも歌の林の恨みて然一の
悲悔となりぬされど三世了達
の大士は来れは生に涅槃の花城
ちりし一紙の花に甚無常を

悲歎し給ふらんや落地座に
元身にそれら會者定離のことわり
をかねつらんやさまも術道振舞
袂をかはしし百ねかきしに雲鳥を
あはれなり百日をもかぎらせいまも
幽田見は霊おくる梅を
けふありて なかく 梅の花 さかりなる

流芝

きる物はりしふりとくちりけれ
吾妹がおもひすてを家にハ
との苦哀を句路り時うつさせ
ともひまれし

物たえ日数かさねて霜ははつ　清淋

悲風徒叶寂寞之居

ものの経ありき押しや霜夜の一蔵　竹しゐ

月花はなかりけるをなげくなら
たゝそて常ちなき風にたち語
とむらひとあるを思ひやりつ

香炬て家をとり来を申しまね　素晋

本覚平等は大虚に八生死の
安雲霞に暫しゆく

今そ去る月や楷に冴えのけ　之江

水仙やひと霜うけし葉のけ　貞巳

朝伴青天之露顕無常姿
暮隨黄泉之流潤有為枝

峰輝にちらさきそふや夕千鳥　以禎

消るまて月影に帰りたし

かすの鐘も迷ひ入て古寺あ

なき跡を尋ねてしも

問ふ事をとひの入まて空へ下る　百林

君まさる身掬して夜半光をこの光　静和

継声もかりかね雁に声そへて

見送るまへ声しれとひと筋の師を

志すところも迷ふその聲うらん

数ならぬ身もなくく入ぬ雲井哉　一葉甲

星たちぬにつのね遠音や秋の風　是如安

薄きちなみのいまそかり

うら悲しく

身に染む涙や精の雨いくつ　光孝

百々日は芳露を掬てひよ
りさまて語り花梢まて絵や
月は雲のうちにさらにつゝる
さしみやうて曳ひよせぬれし
春霞ねりひのけまき宵の音　　機好
まことに士は真砂つひよ汜ゑ
となりうちは浅かりまし
身にまとふ眼ふくみうて露はひきぬ　　鈍爽

ねぶき眼よ河あかりにひかり
寓ゆく
ねむり出しいひ出さぬ雨の霧哉　　桃江
日まゆもゆく落し畑は霧柱　　野川
その縁をとく柳はきかりね夢みつる　　六丸
ちのしまや花の水は粘しきと　　升吉
粧ありし里は花咲や霜の声　　風古

物かく堂前に称え

波水よりけふそめんちるもみぢ　近任

行先のみちにあてのなき霜夜哉　素悟

茶烟や何のもゆかなき軒は風　可悦

木の志しも宇に鋳る千鳥かな　鶯巣

水音の床にあはれや浮寐鳥　年亀

肩縫よくるたもとみや冬ごもり　松心

常なしの風ちりのこるおき枝浮けり　浮るめ

筆捨て霜に香をおく御法かな　北契

ちりてまた出るものはこれまでみちかな　歌孝

思ひ出を分る日ハつらし冬籠　梅守

追風にうしろは淋し宮念仏　浮松

かの筆手向のしは乃れ雲乃　月史

雪風や袖はらしまね袖は雨　蓑風

物言し晩に冬の夜落る樒　東巨

めつらしき紙机も白紙かな　椰蝶

眼もくやいつまで君の殘り薬　三河　山童

手枕つけて晝寢するしるべつと　伊勢　堀居

星なつなき空後しる雪吹哉　因幡　成山

詠めしきの上はまそ帰る雲　二紅

雲こそ佛まもりつうへけり　吟良子

水松や著おく枯のひく編　活子

さきふかをのいふきき

ひきもしはみちやきさん教の香　之朱

川九

蒼きを色をけそ来る十夜哉

香風

掃そうは風はもりは本は葉ぶ

一茅

歩りまく色をのとおれ色うれ

花沙

埋そ火や本は新ふ雨のおと

貢

ふ年もまくうまそふゆは母

月嶋

色枯や附笠りふる吟遊の百

蛙雅

やそ徐乃雪りは本は色色れ

水車

耳たふも綫風ゆきて寒さかな　品川 ちとし

家らしき箕へてさびし枯尾花　對因

明ぼのし枯より凄し雪の音　花笠

菜の花の葉をもつゝまぬ匂ひかな　鈴鳥

ちるかきり水に枯ふす尾花かな　曾川

枯すゝき時雨一色の空もかな　米神

鐘のけさあはれにちるや木立　越後 一點

生涯滑稽の数寄は性質自ら
上は翁をまて海内の人に広く
知れり今は池の人葉月十一日再
かへらぬ旅路にまよひしと聞て

日も西へ走りしさま尾花苑　一具

住みなれ杖と指ぬ綛の霜よ
君達のあとを追ひて行くや

刃よりも所縁見まかり冬籠　田楚

居士函丈に呈せんとて淀川
なる西光寺にまゐりて
家はなりのけのゆくき蓮の花　得芝
蓮をとる人も暮るる蛙かな
見し仏ありけり蓮の
見に二度は酒をくみ来るかな　見外
ちるもの喰へ食ん食ん仏
見し夢はなるるもの来るかな　逸洞

如は是都る光景にて家
に旅舎にて夢を老人は厩を
あるは酒うりて一夜風流
ひのしを海人のやうみ光りら拾
はてはかなき十あまり十七の書
してとやうのなりをあるう
海を見てものを去れ上を
蛙氏やまけるき雨の降るう　遅流
　　古義

眼はなうと見し宵道や望月の映　宗因

[illegible]　風村

師は恩を報ぜん流芝受うけと

なるべき紙衣の道を別れて

[illegible]　祖口

新して禮まるき直を[illegible]　古山

見え遠て[illegible]の[illegible]き氷[illegible]　蒼松

[illegible]　氷壺

今さらに[illegible]なる眼や[illegible]雪　五石

とけぬる面新[illegible]　梅翁

[illegible]　双

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　連

約束の水[illegible]　佛莖堂

蓮池と見ぬ世の[illegible]　[illegible]外

[illegible] 菊枝

一[illegible]色[illegible]し 紬の[illegible]気 枝玉

[illegible] 鳥谷

[illegible]

入[illegible]ある[illegible]ひ[illegible]の[illegible] 丁知

[illegible] 栄山

[illegible]

[illegible]

[illegible] 梅一

[illegible]

[illegible]

[illegible]

思ひ出る[illegible]の 曙や[illegible]氷る 芳山

[illegible]空[illegible]を[illegible]枯[illegible] 樹堂

[illegible]

[illegible] 可合

[illegible]氷る 梅更

露ちるやあらき風の目をぬる　抱叔

時雨ふる中を鳴くなるかりの音　子雲

波はみちをとへと蓋へる芦の花　稲雲

枯てのち枯てもなほ尾花哉　等古

東海道名所をひく岩窟十景

小目当なりける車池老人社跡

福を宮ひろまりへ中ほとり

東海道はしら人墨る老道哉　車路

きはよく我と山を屋てそ秋の月　佳峰

芋秋の口ふ一ッきれぬ一ッきれ　松菜

あるはなと因あるこのもうし

きこゆの声ひきしとやて

花ちるのりちるとはをかなしい春　謝堂

幽玄退福の山うつまかんと紙の個
度をうつくしもうかれたる社号
をもひとなりもあくはひとまりけるを本
意なり　社士と家新形尾の先生文芸地を
同つのうまと四人ひとりもあるへ
をかくしん文塚の金絲結合と雷
をまつりてもうはう社退福をとりもむ
かくしたのまふ列をさあてある
うう庫を海せんおおくはをける
うて意歌志のかくきたるうう絵し

拙とやうはをはりの末なり　一止

老木をも結ぶのちそけをはを

月みるとはたれとそ乃垂　一止

花結屋のをくをうる判変て　南幽

おをしよりまりは出て　合紋　白水

うをもうと自代をうるもの川岸　未月

森社義をうをさくひをを　子良

鐘の音は氏子まもりにひゞく神る　宗古

ふ郭をあけぬ別るゝきく　松成

うつりよは鎚る下萌にてみつけ　岱山

さ花て不いふく朴も人まき夢　通山

淺宵の気りひそくあり叶て　心河

休ませて狩る嵯ほ餅加減　峯生

まけれなかくて西直す人は氣　燕山

佛をのこしてまもる詠請の泥寒　素亮

數ならぬ日よ能りよるつゐき帯　桂布

手ちかく人来る螺は可哀き　花城

持よてつ猫よ氣ちる手屆下　江之

何處よおりてハ神戸よ釣壺　魚手

兎よ角小酒さくあれ妙かしく　之桃

写出よみく月日のさめる　素秋

花からも口きのぬけまきつき　山月

こんな傘てふ衣しと不自由　緑良

紀を新う出油の町まつ里　素庵

八ヶ手社色のちるかる鷲　紙宜

いとけなく這ふまつ長ふ社縁へ　水水

かくを系図を松のせら新　月鍋

まとてゆ海社まつのと思ひう　梅樹

ゆつまをゆく鶴さひしき　万雪

夕月よ苑社来きくと　洲立

引板ひく小家の四て少まつ　一布

ゆ前つる生義社巷をかをて　塘水

伊勢まり生新犬社尾をる　知幽

をゆてををを大家を図自慢　城思

義つををまる土地のをかひ　古良

無社人の差ひ一色を寄る鈴足　松芽

をつ新なりをしを色　斗周

有為轉變

秋空やあまぬ根のとゝふ　左紙后　抱儀

花ちるも新のつゝて月の雪　紙后　好静

卓地を人見まうけ桜けと

ゆよんく國ゝ尾ゝ足けもも

富士こゝよまゆのまん秋の空　紙后　五八九

賜ゝ雪き水社光ゝ和枯尾花　紙后　南要

居士社迷福を雲母苔答まて

ゝゝ秀国社ゝゝゝゝ雪ゝけもも

雪社雲明て通しゝゝ河弥陀経　同　赤宝

八月のあとゝあ第る光ゝの丸　同　茶山

雪ゝ変る枝を休めしゝゝ

居ゝやし山ゝと去ゝて

ゆ人ゝゝ鉄しゝ居社春　同　北洋

[illegible]

[illegible] 三相 大樣

[illegible] 日 如亜

[illegible] 日 峯雄

[illegible] 京 後輝

夢よ眠れ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 秋 乙良

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

置賜て又蓋しうの茶杓霧　三河　壽一

夫れ小沼くの乃ち民身の雲　貞山

数寄の中の茶杓なりしかども

山杜鵑の月を分て聞時　洗竹

もう柳の つ枝ひ民　達堂

蓋の中の雪の夢　澗月

一日さし敷て来ぬや新茶壺　一庵

風を内裏て出れ来ん時　五蓋

ひと夜とも知ぬ雪の宮　春度

なら敷の中きの敷ちも　左蓋

さ沙の河底さ経来れ　梅史

日経なり我きの敷　牧丈

種すもも四ろう一ふき秋の風　梅居

[illegible]牛を引くむ里分　菜正
打ニ一汐水なりしとき　六樽
稲妻なりしとき　雷の中ル　波筆
舟社堀の角　みや社の角　東石
山里や行くなり　小来砧　二吉
あらしなる杜の角　あらしなる　彩石
雲や出ル坂社　しを山川　畝曲
水うつ一や一角ん　ちむ差　薙雲

屏風蓍を煤　以角ろ仁紫花乱　錦水
ちゆ水ちゆ水うつ　ちゆ蛍乱ル　風栗
流ニ一紙の子入　やみ社月　以角
網打社田を　やあきの白　可松
雲やちゆとり社　雨社日　星水
水うつや雲ル　なる仁秋の稼　樹石
ふかゝ玉橋ゆく　や社ゝ玉　里敬
山ゝ出ゝ　一や秋の月　波文

秋風や蓮は葉うらの白さ　恍一

[illegible]　玉考

[illegible]　柳月

[illegible]　五陵

[illegible]　西昇

[illegible]　樟雨

[illegible]　菊泉

[illegible]　蒼尾

[illegible]　秋夢

二つ折かさねや三日の月　青池

[illegible]　枝葉

[illegible]　撰江

[illegible]　翠錦

[illegible]　月嘘

[illegible]　三岳

[illegible]　石泉
[illegible]　菜岡
[illegible]　吳雪
[illegible]　相古

[illegible]　常江　常永
[illegible]　猪水
[illegible]　為中

[illegible]　氷雪
[illegible]　為八
[illegible]　年と
[illegible]　杉洲
[illegible]　双竹
[illegible]　丹井
[illegible]　夏葉
[illegible]　釜森

隣自ら新たなる人等社寺
あるも家うつくしき鈴叩
堂宮一宮をまもる行の垂く引
山月や多くのけさ人角こ橋
七夕は無ふこのとも相ひと案
稲妻や風を吹きまと宵社示
細道や義出まふまて霧吹き
見まうまる中洲の出来て広社月

清舞
杜水
梧宮
清如
耕宇
白白
尺浦
嵐牛

ひとり来て寺ら夜明を見ふ
おく霧ふ出つまる宮や五社川
見てまく人まりきまをきりく人
表家てまふ中小まる人霧生て星
注意一出て横ふ乃ら中ふきふ
茅社色やりまひりく寺社庭
茅の月を暑い昨年や稲の色

駿河
碧山
南輝
青雀
仙壺
近人
抱布
伯耳

[illegible]　竹友

[illegible]　其芳

秋の[illegible]や蓋のかすかに[illegible]酒壺　一晁

山川は[illegible]　[illegible]は月　樗舟

[illegible]の[illegible]　山書

[illegible]や[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　伯玉

[illegible]　[illegible]　[illegible]　守唐

七夕や[illegible]　[illegible]

[illegible]　伊蓋　文林

[illegible]　仁法　圭布

[illegible]　[illegible]　[illegible]

川[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible] 摂平
[illegible] 越秋
[illegible] 白相
[illegible] 丹波
[illegible] 尾張 [illegible]
[illegible] 備
[illegible] 近江
[illegible] 楚江

[illegible] 一武
[illegible] 伊勢 昌風
[illegible] 紀伊 [illegible]
[illegible] 東宇

○

[illegible] 薩宇
[illegible] 完伍

君の宇源太さつきの夜のおと　水竹

さつきはなくて淋しき木槿哉　蹇馬

帝国図書館
56309
14